

小池辰雄往生十周年記念講筵 み霊、聖言、祈り

2006年9月10日（東京新宿）

小池辰雄先生の往生十周年記念会

皆さん、こんにちは。今日は小池先生の往生十周年記念会ということで、ここに集まってくださった方々は本当に先生の志をついで、福音のために身を捧げようという、そういう思いの方ばかりだと思っております。

「師の跡あとを求めず、師の求めたる処ところを求めよ」

という言葉がある。つまり、

「まねごとばかりするな。形だとか、いわば外側から先生の真似をするのではない。

その先生が本当に求めておられた究極のもの、それに向かってひたむきに進め」

ということだと思う。私たちが先生の何周年とって記念会をやります時にも、もちろん先生のことを思うわけですが、

「あの先生はこの時こうだった、あの時どうだった」

と、いろいろのことを思い浮かべるのは構わないけれども、我々の究極の願いは、師の求めたところを求め、それ以上のものに向かって進んでいくということです。よく小池先生が、

「師の屍しかばねを乗り越えて行く」

と言われた。内村鑑三先生が向こうに逝かれた時に藤井武先生がそういう言葉を発せられたとか聞きますが、屍を乗り越えて行く。そういったことは、とかく先生中心主義になりがちなのこの世にあつて、

「先生中心主義じゃない。師の求めたところを求めよ。そこにおいて一つになれる」

ということを行っているのだと思います。私が今日お話するのも全くそういう角度から——単に先生を偲ぶとか、また、先生はこうだったということではなくて——本当に先生が何を大事にされ、何を訴えようとなさっていたのか、それを皆さんともう一度味わい、更に深めていきたいという思いで今ここに立っています。

私にハプニングがありまして、突然、眼鏡めがねがこわれた。それで、聖書が読めないんですよ。

「おまえは目で聖書を読んでいるあいだはだめだ。眼鏡をかけて読んでいるあいだはだめだ。身体に覚え込め。身体に覚えこんで、そこから出てくるものだけが、お

まえの読めたものだ」

と。今日は身体の中にあるものを吐き出そう、それと数日前にメモをとっておいたものを抛

り所にしてと思った。これも何かの啓示なのかもしれません。肉眼の目が見えなくなっても、心眼、霊眼でもつて神の御言をしつかり受けとるように、読みとるようにと、そういうことかもしれないと思います。

み霊・聖言・祈り

私が今日、皆さんにお話したいことは、まず題から揭げますと、「み霊、聖言、祈り」です。先生は「みたま」を「み霊、御霊、聖霊」とお書きになりました。それから、「神霊」という。たとえば、大言海に

「人とは神霊の止まつてゐるもの、霊の止まる存在」

とある。神霊の止まつてゐる存在、これが「霊止」なんだということをよく仰いました。ただ、あまり神霊という言葉はお使いにならなくて、大体、「みたま、み霊、御霊、聖霊」というような言葉をお使いになっていました。

私は、小池先生が大事になさってきたことは、「み霊、聖言、祈り」この三つだと思っています。それに対して、皆さんから、

「十字架、復活はどこにいったんだ。砕け、無はどこへいったんだ？」

と、いろいろクレームがつくかもしれませんが、それはこれからの話の中でちゃんと出てきます。私はこの「み霊、聖言、祈り」の三つが我々の日常生活、私たちのいわば信仰

生活——しかもそれは天国での生活ではなくてこの世での生活です。正にこの世は悪しき霊がすさまじくその力を発揮しているような現代の中で——我々がキリスト者として歩んでいく歩みの中で最も大事なものは、この「み霊、聖言、祈り」であると受けとった次第です。

霊なるキリスト

小池先生の『無者キリスト』（小池辰雄著作集第一巻、1975年刊）は、第一部「キリストの実存十転」、第二部「人間の福音的実存七相」、第三部「無的実存」の三部構造になっています。「キリストの実存十転」は、天界におられる霊なるキリスト、そして受肉のキリスト、それから地上で伝道なさり、最後は昇天なさって再臨のキリストという、そこに至る十の転機をつかまえている。私はそれを今一々フォローするわけではないけれども、イエス・キリストというのはどんなお方であったのかを、まずたどってみたいと思います。

まず、父と共にいた「ロゴス・キリスト」ということがヨハネ伝の一番初めにあります。

「初めに霊言（いのち）」

とか、神と共にいらつしやつた霊なるキリスト。霊的人格というか、霊格なるキリストです。そういう初めの、天界に父と共におられた「霊なるキリスト」があります。それからそれが降つてきて「受肉のキリスト」になります。このヨハネ伝の第一章にあります「霊なるキリスト」がとにかく非常に大事なところですよ。

「^{はじめ}太初に言あり、言は神と偕^{とも}にあり、言は神なりき。²この言は太初に神ともにもあり、³万^{よろず}の物これに由りて成り、成りたる物に一つとして之によらで成りたるはなし。⁴之に生命^{いのち}あり、この生命は人の光なりき。」(ヨハネ1:1-4)

という。これは父なる神に向かい合っておられた霊なるキリストです。神性を帯びておられますから、この方は

「言は神なりき」

とあります。しかしながら、これは父なる神とそこで向き合っておられる別人格だということになってゐる。そして、よろずのものはこの霊なるキリストによつて造られた。このお方が言葉を発せられると、いろいろのものが造られていく。創世記の始めでは、混沌としていた。闇が深く地を覆っていた。しかし、その闇は混沌だけれども、そこに神の霊がただよっていた。「光あれと言われたら、光が在った」というふうに、言葉をもつて天地を創造された。混沌の中から生み出してこられた。闇があつて、その淵の上を神の霊が覆^{おお}つていた。

「光あれと言いたまえば光があつた」

という、言葉によつての創造がありました。創造というのは生命を与えることでしょ。生み出して生命をわかち与えることです。だから、造られたものはすべてよかつたんです。それが自然界であろうと、最後に造られた人間であろうと、みんな神さまの言葉、生命に、

「この言に生命^{いのち}があつた」

というものによつて造られていますから、みんな生きてゐるわけです。生きていたんです。

そういつた根源なる言、霊なるキリストはこの「父なる神」と一緒におられた。この父なる神というのは、受肉されたキリストが「父よ」と呼んでおられた。それまでは、「父なる神」なんていう言葉はなかったと思います。小池先生は「根源霊」と呼ばれたこともあります。「宇宙の大霊」と呼んだり、「アラー」、「ヤハウェー」と呼んだり、いろんな名前は何でもいよいと言われた。名前で限定できない本当に根源なるお方です。そういう根源なるお方と向かい合つておられた霊なるキリストが、やがて人として顕れてきたのがクリスマスということになるわけです。そういう構造です。構造というのか、世界というのか、何というのかわかりませんが、我々の理性を越えた次元です。

受肉

「初めに根源霊ありき」

という、その根源霊なる方と共にいらつしやつた霊なるキリスト。このお方が父なる神の御旨^{みむね}にしたがつて、この世に生を受けられたのが「受肉」です。この受肉というのは、これはまた非常におもしろい。「肉を受ける」と書いてある。我々は、「受霊」という。これは霊を受けることです。受肉というのは、「肉体となつた」という普通の意味で考えてますけれども、字を見ていたら、肉を受けるといふ。霊なるお方が肉を受けとられた。「肉」といふ

のは我々の姿、本性なんです。我々の本性であるその肉をお受けになった。それはピリピ書にでています。

「彼は神の貌かたちにて居給いしが、神と共に神と等しくあることに固執しないで、反かえつて己むなを空しくし、僕の貌かたちをとりて人の如くなつた。すでに人のさまにて現れ、十字架の死に至るまで従いたまへり」

と。肉の姿を受けとられた。ここで我々と同じ次元に立つてくださった。霊なるキリストが肉を受けて、私たちと同じ姿になってくださった。でも、その方に霊があります、我々に霊があるのと同じように、人としてのイエスというお方にも霊がある。霊がなかったら、人ではない。イエスというお方にも霊がある。しかし、そのイエスというお方にある霊は、我々と同じ人間の姿をとっておられるんですから、これはどんな霊だったんでしょいか。

この霊の姿が実に貧しいすがたでした。ここをつかまえたのが小池先生です。

「恵福さいわいなるかな、霊の貧しき者。天国はその人のものなり」

という、マタイ伝5章の3節のあの一句をつかまえて、これが福音の鍵かぎだと言われた。

自己執着が罪

我々は受肉どころか、始めから肉のかたまりです。我々という人間はそこにやはり霊があるわけですが、この我々が持つている霊たるや——神霊の止まるものを霊止ひとという——

——そこから遠く離れて自己中心という霊です。ちつとも貧しくない。「己おのれ、己おのれ、己おのれ」で満ち溢れている。自己追求という。これが死なんです。自己追求は結局、死をもたらすわけですよ、「罪の価は死なり」と言いますように。

「自己追求が罪だ。罪とは何か、これは自我である」

と小池先生は仰る。「自我である」ということは自己執着しよくです。自己執着というのは、神さまはどうでもいい。

「自分の役に立つなら使おう、役に立たなかつたら捨てよう」

という、神さまさえも自分の召使にするというのが人間なんです。これを「罪」という。よくわかるでしょ。日本の諸宗教は何であんなにはやっているか。この自我を満たしてくれるからはやっている。「十万円出したら百万円返ってくる」と思つて献げるわけです（笑）。

「自分は死んでもいい。どうぞ、これをあなたの栄光のために」
という、そんな志ではない。受験生だつてそうでしょ。「菅原道真すがわらみちざねさんにお祈りすれば試験

に通してくれる。他の人を蹴落としてでも通してくれる」と思つて、みんながそれをやっているわけですよ。結局、何もならないけれども（笑）。

自己執着が「罪」であり、これの行き着くところは死なんです。これが我々の自然な姿です。「何が悪い、人間とはこんなものだよ」とこの世では言っているわけです。

聖意体現

ところが、この受肉された、肉を受けとられたイエスというお方の霊は、不思議なことに貧しい。ということは何かといったら、「からっぽ」ということです。神さまの前に自分からはからっぽで、己おのれを何ものともしていない。そして、この霊は父なる神さまを、根源霊なるお方を「父」と呼んで、「父よ!」と祈っておられる。しかも、祈っている内容は、

「あなたの御意みこころが成りますように、天におけるごとくこの地においても。私を通みちして成らしてください」

と、自分を投げ出している。自分の方はもうすつからかんで、

「ただあなたの御意だけが成りますように、御旨みむねが成りますように」

と——聖意体現です——そのことだけを祈っておられる。

「御国みくにを来きたらせてください」

というのは、

「あなたのいらつしやるようなその天界すがたの相を地上に、どうぞ早くもたらせてください。御名みなを崇めあがせてください。私ではありません。この世ではありません。あなたの御名が崇められますように。御国みくにを来きたらせてください。御意が天に成るように地にも成らせてください」

と。そしてやつとその次に、

「毎日の糧かてをお与えください」

という自分の話になってくる。そういうのがどこまでも神中心なんです。

その霊の貧しいお方が、30歳くらいまではほとんど知られていないわけですよ。12歳のイエスの話がちよつと出てくるくらいです。その間イエスは何をなさっていたか聖書には書いてない。もちろん外側は、大工さんのお手伝いはしたでしょうけれども。イエスは祈り深かった。深い祈りのひとだった。

受洗

そして時みちて現れてこられた。ヨハネの所に来てヨルダン川でバプテスマを受けられた。ヨハネが

「私こそがあなたからバプテスマを受けるべき者であるのに、あなたは違います」

と言っているのに対してイエスは、

「いや、私も受けさせてほしい。私は特別ではない」

と言つて、自分の身をヨルダンに浸された。そして、水から上がって祈っておられた時に、天が裂けて聖霊が鳩のごとく降くだってきた。そしてその時に、

「これこそが私の意こころにかなう者、わが愛する子」

という聖声^みがあつた。

この霊貧しい姿になることが、人間は今までできなかった。ところが、たった一回きり初めてそういうひとが現れた。だから、天が開けて聖霊が鳩のごとく降ってきた。霊貧しいイエスに聖霊が——この聖霊は父なる神の霊です——降つてきて一つになった。イエスご自身の霊と父なる神の霊とが一つになった。これを主イエスは何と呼んでおられるかというと、このお方のことを「聖霊」と呼ばれた。父なる神の霊が直接来たから、聖霊なんです。

預言者たちには、やはり霊は臨んでましたよ。けれども、預言者たちといえども霊貧しくありません。預言者たちもやはり肉においては罪びとですから、父なる神の霊は臨んで導いておられるけれども、中に入るといふことはなかった。そばにいていろいろ言葉を与えて、預言者たちを導きました。でも、預言者たちはその神さまの霊の前に懼れ^{おそ}おののいている。イザヤだって、エレミヤだってそうです。けれども、霊が迫ってくるから、その言葉に従わざるを得ない。イザヤの場合には唇を清められて、

「もうおまえの罪は問題ではない」

と言って、神さまの聖言^{みことば}、御霊^{みたま}が臨んでくるけれども、やはり根源的には我々と同じ人間です。から、本当の意味の霊貧しい姿には預言者といえどもなりきれない。洗礼のヨハネといえどもそうです。だから、

「ヨハネは最大の預言者だ。けれども、天国においては最も小さい」

とキリストは言われた。なぜかということとはまたあとで申します。このイエスというお方だけが本当に霊が貧しくて、神さまの霊を100%に受けた。それがヨルダンでの「受洗」という出来事です。それでいい気になられたかというところ、そこがちがう。普通なら、それはいい気になるでしょう。歴史上ただ一回きりですもの。しかも、聖言^{みことば}が臨んできて、

「おまえを愛しているぞ、おまえこそ私の心にかなうものだ」

と、向こうから一つになって抱きしめてくださった。

霊戦

これはうれしくてしょうがないと思いきや、すぐ御霊^{みたま}に追いやられた。荒野の試みでしょ。私は、イエス・キリストが修行をなさったのはあの時だけで、あれは本当に修行と言うべきものだと思います。それ以降は、楽しくて山に籠もって祈っておられたと思う。夜を徹して祈られたとか、十二弟子を選ばれるときに徹夜して祈られたというのはちつとも苦しくない。けれども、あの荒野の四十日四十夜はきつかっただろうと思います。なにも自ら進んで行かれたのではなくて、御霊に追いやられて行かれた。四十日四十夜というのは長い。その間、人はいない。獣がいた。それから、サタンがたびたびやって来る。四十日目くらいで、最後になつて、

「石をパンに変えてみる」

とか、

「高い所から飛び下りてみる」

とか、世の栄華を示して、

「私に跪ひざまずくなら、これを全部あなたにあげる」

とか、いろいろこの世的な誘惑をするわけです。パンの問題、つまり経済の問題。それから奇蹟です。高い所から飛び下りて、さつと天使がささえる。

「これはすごい、あれは教祖様だ！」

と言って、みんなついていく。この世の富はみんな差し上げると言う。だから、人間の自己執着を満足させてくれますよ。もうすべての宗教家としての条件は整えられるわけですから。しかし、それを拒絶される。

「神にのみ従え。人が生きるのはパンのみではない。もつと根源的に神の言ことばに

よって生きる。神の言は靈なり生命なり」

人は神の靈によつて生きるように造られた存在だ。肉体というのも、そういう神の靈と一つになった肉体だからこそ、神さまのご用に役立つ。神の靈、神の聖言のなただの飯食い人間、そういうようなものではだめだ、ぶくぶく太っているのではだめだというわけです。そうでしょ、あれは実に現代に対する警鐘を鳴らしているわけです。本当に成人病だとか何だとか、いろんなことが起きています。

私はあの荒野の試みというのはきつかっただろうなと思う。しかし、あれを小池先生は、

「肉の力で戦つたのではない。聖靈によつて戦つた」

と言われます。お受けになった聖靈、その方にだけ自分を委ねられた。それで四十日戦いぬかれた。「靈戦」と言われる。普通は、「荒野の試み」とか「誘惑」とかいう表現ですが、小池先生は靈戦、靈と靈との戦いだと言われる。サタンの戦いにみごとに勝たれたわけです。

伝道

それから伝道が始まった。そして、伝道の第一声が、マタイ伝でいうと、

「恵福さいわいなるかな、靈の貧しき者、天国はその人のものなり」

と。あのお言葉はもう受肉された時から、私は始まっていたと思う。靈貧しいから直接、神さまの靈が降くだってきた。我々は、靈が貧しくないから直接来ない。来るのは十字架を通してです。十字架で靈貧しくされる。無をたまわる。それがないと来ない。しかも、それで来る靈は父の靈ではない。キリストの靈なんです。

だから、小池先生は、キリストの靈、御靈いわゆる「聖靈」と「神の靈」とは違いますよと——「違いますよ」とまでは言われなくても——我々はイエスさまのように直接、「父よ」と祈れない。直接、「父よ、靈をください」とは祈れない。私たちは、

「主よ、主キリストよ」

と祈る。なぜならば、キリストこそが我々を霊貧しい姿にしてくれている。罪と死から解き放してくれている。十字架で全部ぶちこわして、しかも永遠の贖いをただ一回きり全うしてくださった。もう古い我々はそので碎かれている。だから、キリストの霊がやつてくる。

キリストの霊を「御霊」と先生は呼んでおられる。「聖霊」というのはもつと広い概念です。イエスさまに直接臨んだ父の霊、これは聖霊です。イエスさまの方は、

「私をボロクソに言うことはゆるされる。私に対してどんな穢しごとを言ってもいい。しかし、私の中に宿っておられる父の霊、この聖なる霊を穢す者は永遠に赦されない」

と言われた。イエスさまにとって、この聖霊というお方は、自分のところに天から臨んできた霊ですから、自分とは別人格なんです。この方の前に平伏しておられる。だから、

「このお方を穢す者は赦されない。私という人間イエスをボロクソに言っても大丈夫」

と仰った。そこにイエスの、父なる神およびこの神さまが遣わしたもうた聖霊というお方に對する砕け、畏敬、平伏しとか、尊ぶとか、そういったお心がものすごく表れている。

無者

そういう姿を先生は、「無者」と言われた。

「全く私心なき人、神の前に己を何ものともしてないお方、これがイエスの本質だ」

と。何ものでもない、平伏しの砕けの霊だからこそ、父なる神の霊が滝のごとく降ってきた。充滿した。だから、

「私を見た者は父を見たのである。私と父とは一つである」

と言われた。霊的次元において、霊なる存在において全く一つであるという。

それは我々には、手放しでは絶対に言えない。我々はいつ言えるかというと、ヨハネ伝14章、15章に出ておりますように、キリストはあのお別れに際して、

「私は父にお願いしよう。そうすれば、父は別に助け主をあなた方に送って、永遠にあなた方と一緒におらせてくださるであらう。私は父の御許に行く。けれども、また再び私を見るようになる」

と。「再び見るようになる」と言われたのは、直接には復活のことを指しておられるんではないけれども、

「聖霊という姿、御霊という姿であなた方は私を見るよ」

ということですよ。

「御霊は私に栄光を顕す」

と、ヨハネ伝16章に出ております。地上におられたイエスは

「慰め主、助け主として聖霊という方があなた方に注がれる」

と仰っている。けれども今度は、天上に帰ったイエスからすれば、それは実はご自分の分霊であつたわけです。ご自分の霊をわかし与えてくださる。だから、一つなんです、私たちはキリストという霊なるお方と私たちが一つになれるというのは、ご自分の分霊だからです。そのキリストの霊は父なる神さまに対して平伏しておられる。一つであるお方だから、キリストと父とは一つ。キリストと私たちは御霊にあつて一つ。だから四位一体です。父なる神と、御子なるキリスト、御霊のキリスト、そして今度は御霊をいただいた我々。この四位一体が成就することです。

その根底に何があるかという、我々を邪魔している自己執着を十字架で全部片付けてくだされたということがある。あの愛に生きたイエスです。人に対しては愛そのものです。しかも、その愛は言葉の愛ではない。死人をも甦らせる。病める者に手を置いて癒される。あるいは、言葉で癒される。本当に人が一番苦しんで悩んで、そこから解き放されたいと思っているものを全部満たしていかれました。それは決して、自己執着を満足させるといふのではなくて、神さまの愛の証なんです。神の愛というのは言葉ではなく、事実であり、力であるということです。

「私が神の指でサタンを追い出しているのなら、もう実に神の国はあなた方のところに来ているんだ」

と言われた。言葉で悪霊を追い出す。言葉で癒される。死人は甦らされる。

ローマの支配から脱却するとか、そんな次元ではない。人々はダビデ王国の再来ということとを望んだ。洗礼のヨハネさえもイエス・キリストに疑いをいだいて、牢獄から弟子を遣わして、

「私たちが待つお方はあなただと思っていました、ひよつとしたらそうじゃないかもしれない。他に誰かを待つべきですか？」

と尋ねさせました。その時にイエスが仰った言葉は、

「ヨハネに言いなさい。盲者は見え、跛者は歩み、癩病人は清められ、死人は甦らされている。貧しき者は福音を聞かされている。私に躰かない者は幸いですある」

と言われた。ローマの政治的支配からの解放とか、この世で富める暮らしをするとか、不老長寿をいただくとか、そんなことではない。本当に神さまの愛に、神の生命に触れて人が新しくされる。神さまと一緒に生きる、そういう在り方、即ちキリストが生きておられるような在り方に人を導いていく。それを「徴」としてなさった。

あの五千人の人を五つのパンと二匹の魚で満ち足らわされた。あれは徴なんです。分かち与えて、そして残りくずを集めたら、十二の筐に満ちた。また、もう一回、四千人の方になされた。その時は、七つの籃でした。とにかく、無限無量なんです。それを顕された。全部、徴なんです。きたるべき神の国の徴です。そのように御業をなさった。

十字架と復活と聖霊降臨

そういうイエスは、最後はその助けられた民衆が宗教家に煽動され、十二弟子は逃げてしまい、一人は裏切つて、実に惨憺たる死です。十字架でのイエスさまの死というのは、弟子たちにとって、当時の人々にとって、もちろん宗教家にとって、イエスの敗北なんです。神の側の、イエスという方が信じていた神さまの敗北です。ユダヤの宗教家たち、祭司・パリサイ人、そういった者たちの勝利だった。だから、弟子たちは本当にがっかりして、エマオへ旅立つて行ったり、本当にペシャンコになった。

ところが、復活という姿で現れてきた。復活が弟子たちにとっては大逆転の場であつた。弟子たちはその事柄の法則は全然わかつていない。現象だけを見ている。自分たちが大事にしていた先生があんな無惨な死に方をして墓に葬られて、何もかもお終いだと思つていたら、

「私は生きているよ」

と言つて現れてこられた。墓へ行つてみたら、亡骸なきがらも何もない。マリアに現れた。また、弟子たちのいる所にスツと現れた。これはもう大変な方だということです。しかも、直接語りかけられたんですよ。お魚をムシヤムシヤ食べたとか、そんな話のつてますように、これはまったく当時の人たちにとってはびっくりするような事実です。びっくりだけではすまない、もう腰がぬけるような事実です。だから、弟子たちの宣教は何ですか。まず、

「キリストは甦よみがえられた」

と。使徒行伝を見てごらん下さい。

「あなたが十字架につけて殺したキリストを神が甦よみがえられた」

と。その復活を通してこの方こそがメシヤ、救い主だということがはっきり証明された。この復活という事態が、イエスが救い主であることの証明なんです。死んで敗れたのではなく、勝つた。死に勝つたんだというその証明だった。使徒行伝をごらんになつても、とにかく「復活」ということが一番、表に出ているわけです。

ただ、復活されたキリストに出会つたからといって、すぐに弟子たちは生まれ変わったわけではありません。四十日間、キリストは地上にいらつしやつた。そして、たびたび現れた。けれども、四十日たった時に弟子たちに、

「自分は天に帰る。祈つていなさい。そしたら聖霊が臨む。聖霊が汝らに臨む時に汝らは力を受ける。そして、世の終りまで地の果てまで我が証人とならん」

そういう約束をして天に昇つていかれた。ポカーンと口をあけて天を仰いでいたようです。

「なにも口をポカーンと開けなくてもよろしい。キリストは再び、あなたが天に昇つていかれるお姿を見たように、もう一度降くだつてきてくださるから」

というように、天使たちの言葉が使徒行伝の始めのところに出てます。そして、十日目に――別に「十日祈つておれ」と仰らなかつた。「ずっと祈つていろ」と仰つた――あのペンテコステという五旬節の日に火の聖霊が降つてきた。そこから弟子たちは立ち上がった。

弟子たちは復活という現象に本当に驚き喜び目覚めた。それから更に四十日を経てイエスが天に昇られた後、祈りつづけて十日後、すなわち五十日目に聖霊降臨が起きた。そこで内的に目覚め、力を受ける。今までは、

「幻かもしれない」

と——記憶というのは、どんなに凄いものにぶつかっても、日がたつと風化していく——

「あれは錯覚だったかな？ あんなことがあつたな」

というところで風化する。それが聖霊がうちにおいでになりますと、ちょうど受肉のイエス・キリストが聖霊を受けられてたえず父なる神と交流して祈っておられたように、今度はうちに宿りたもうた御霊みたまのキリストが、復活して天にのぼられて天におられるキリストとの間に交流する。呼ぶわけです。キリストが「父よ！」と呼ばれたように、今度は「主よ、天界のキリストさま！」と呼ぶ。御霊が呻きをもつて、我らの霊と一緒に呼んでくださる。

根源現実

私たちの霊はなくなりません。私たちの霊はずっと同じ霊なんですけれども、その霊が今まで罪と死に霊縛されていて死んでいた。それが十字架で解き放たれた。そして、聖霊が来てくださったって、私たちの死んでいた霊が生きる霊になった。御霊のキリストはその私たちの霊と本当に一つになって祈ってくださったっている。「祈るんだよ、祈るんだよ」と促される。

「あつ、そうです。はい、祈りましょう」と祈られる。

「御霊言い難き呻きうめをもつて執り成したもう」

と言うでしょ。私たちはボヤボヤしてましてね、いくら十字架で解き放たれたって、その時は喜んでいてもすぐにまた眠りこける。そういう霊です。ところが、御霊のキリストはうちにあつていつも執り成して祈ってくださる。我々がショボンとする時には、慰め主、助け主です。それは至れり尽くせりのお方ですよ、この助け主、御霊は。だから、小池先生は、

「この聖霊は何ものにも代えられない」

と仰った。悩める人間小池辰雄が抛り所にしておられたのがこの聖霊なんです。小池先生は、

「この十字架は根源現実である」

と言われた。十字架で永遠の贖いをただ一回まっ全うされた——へブル書に出てきますね——この贖い、永遠の贖いは霊的次元において、天の次元において完全にもう成就してしまっている。だから、過去・現在・未来の私たちの全生涯を——過去と言うときには、私を生んだ親からまたその親と、ずっとあるでしょう。遺伝的に罪というものをもらっているのだから。それからまたこれからもあるかもしれない。私の地上の生涯のみならず、もつと先もあるかもしれない——そういった私という人間に発する過去・現在・未来の全部を根源的に贖いをつたという。これを先生は「根源現実」と言われた。だから、先生は根源現実と、あいかわらずの人間小池の生なまの現実とがある。

「人間小池は死に至るまで罪びとだよ」とはつきり言われました。

「聖霊を受けたからといって、いきなり聖人になったり、いきなり潔くなったり、そんなことではない。人間小池は死に至るまで罪びとだ」

と言いつづけられましたね。私は、ある程度のところまで、「だいぶもう、死に至るまでの罪びとが少しくなりました」とでも言ってもらいたかったんですけれども（笑）。とことん、

「相対的人間小池は死に至るまで罪びとだ」と言われた。でも、

「罪びと小池の奥にあるこの根源現実^ルは聖なる事態であつて、これをけがす者は赦されぬ」

と。ちやうど、イエスさまが、

「聖霊をけがす者は赦されぬ」

と言われたのと同じ權威をもって、

「この根源現実^ルを、この賜りたる無を否定する者とは断固戦う。これは私のものではない。恵みで賜^{たま}つたんだ」

と。恵みというのは自分の価値に拘^かわらない。自分がいい子だから、祈り深いから、敬虔^{けいけん}な心を持つてゐるからとか、そんなことに一切拘^かわらない。無条件に恵みとして天から直接与

えられる。これが絶対恩寵です。絶対の恵みというのは、

「おまえの姿に拘^かわらない」

ということですよ。人間は相対なんです。いい人に対してはいい顔をする。憎むやつには「この野郎！」と思う。思うだけならいいけれども、蹴飛ばす（笑）。それが人間なんですよね。それで小池先生は、「死に至るまで罪びとだ」と言うのは、やはり、「こんちくしょう！」とか「あの野郎！」とか自分でもよく言っておられたでしょ（笑）。

十字架・聖霊一如

人間は死に至るまで罪びとだけれども、その奥に本^{ほん}当^{たう}に根^ね源^{げん}現^{げん}実^{じつ}を、無^むを賜^{たま}っている。この無^むというのは絶対空間^{ぜったいくわん}というか、真空^{しやくう}というか本^{ほん}当^{たう}に何^{なん}もない。イエスが霊貧^{れいひん}しい姿であられたのと同じ次元^{じげん}のものをいただいている。そこに聖霊^{せいれい}が来てくださる。その根源現実^{げんげんじつ}の、十字架ですつかりきれいにされた、その空間^{くわんくわん}を真空^{しやくう}で置いておかれぬ。そんなところを真^ま空^{くう}で置いていて、サタンが来たらエライことですから。贖^{あがな}われたら、もうその瞬間^{しゅんげん}に同時に聖霊^{せいれい}が来て、そこを占領^{せんりやう}なさる。

「ここは聖なる場所だ、なにものも立ち入るべからず」

と。だから、「十字架・聖霊一如^{いちにょ}」なんです。もう復活^{ふくたつ}なんて仰^{おほ}らない。十字架と聖霊^{せいれい}というのはちやうどコインの裏表^{うらおもて}みたいなものです。十字架・聖霊一如^{いちにょ}です。

十字架はイザヤ書53章のあの残酷な現実です。

「彼は我々の咎のために打たれ、その打たれし傷によつて我々は癒された。我々の不義のために彼は砕かれた」

「神はこのイエスという方を砕くことをよしとなし、喜びとなしたもうた」

というようなことが書いてあります。あの十字架です。それから、イザヤ書35章は天国的な、聖霊の現実です。聖霊が与えたもうのはこういう天的事態であつて、この、

「35」53（53分の35。イザヤ書53章を土台にしたイザヤ書35章の事態）

これは一つだと言う。コインの表と裏の關係にある。「これが来たら次に」という言葉では順序があります。しかし、事実としては一つです。十字架が貫かれた時には聖霊が来ている。そして、今度は逆に、

「十字架に裏付けられない霊の世界は危ない。霊的現象はいくらも起きるけれども、その現象に惑わされないように。本当に十字架の前に平伏しているか。十字架の前に平伏していない霊は始めは聖霊みたいであるとしても、すぐに切り替わるから危ない」

と、何度も仰つたでしょ。ところが、聖書を見ますと、そういうふうに順序だてては書いてない。パウロの経験はいきなり復活のキリストが天界から現れて——姿は見えませんが、声

があつた——光に撃たれてぶつ倒された。目が見えず、耳が聞こえず、ものも言えないような状態になつて、仮死状態で三日間を過ごします。ただ、霊は生きているから、祈っていた。

「あなたはどなたですか!？」

「汝が迫害するイエスである!」

と。そう言つて復活のキリストが現れたでしょ。パウロの場合には、十字架よりも先に聖霊がパウロを撃つて、アナニヤの按手を通して霊眼が開かれた。それから後、徐々に十字架というものは凄惨ということに気づかされたわけです。人間イエスを知らないパウロが一番先に霊なるキリストに出会い、しかも霊なるキリストが先にパウロを撃つて、ご自分の聖霊を与えた。彼は聖霊の根底は実は十字架だということを——ダマスコで深く祈つたと言われていますけれども——そうやつて祈りを通して正に、

「われ主と共に十字架せられたり、もはやわれ生くるにあらず、御霊のキリス

トわがうちに在りて生き給うなり」

という現実をつかまえた。一番はつきりそのことを書いてくれているのがローマ書やガラテヤ書というパウロ書簡です。

聖霊の使徒行伝

弟子たちというと、イエスと一緒にご飯を食べて三年間一緒に過ごしていながら、十字

架の場面では逃げ出してしまった。そういう不甲斐ない弟子たちが今度は、復活のキリストに出会って、ものすごく喜んで、それから聖霊を受けてから、あの使徒行伝にあるめざましい働きをします。そこで彼らが宣教しているのは、まず復活のキリストです。

「おまえたちが十字架で殺したあのイエスを——罪人として、極悪人として、しかも神を冒瀆する者として十字架につけた——そのイエスを神は甦よみがえらされた。この離れ業わかれわざを通して、この事実を通してこの方こそが救い主キリストである、メシヤである」

ということを世に公言した。これが宣教だったんです。それをひっさげて、行くところ行くところで御霊みたまの御業みわざがいつぱい起こります。これは復活のキリストが弟子たちに、ペテロやヨハネに乗り移って働かれますから、彼らは自分ではわからない。跛者あしなえに対して、

「御名みなによって立て！」

とか言ってますよ。

「私に金銀はない。しかし、私にあるものをおまえに与える。イエス・キリストの御名によって立て！」

と言って立たせたら、たちどころに立つて、まあ大騒動でしょ。それから迫害を受けてます。でも、迫害を受けたことを喜びとして帰って行っただけ。自覚としては、十字架・復活・聖霊という、そういった構造的な自覚はなにもないわけですよ。復活されたキリスト、それか

ら自分たちと一緒に働いてくださるキリストによって、

「御名によって癒いされよ！」

とかやっているわけです。やっているけれども、それがどういうことかというのはよくわかってないと思う。それを言葉で、いわば神学的に罪と死の問題、旧いアダムと新しいアダムとの関係とか、そういったことをしっかりと説き明かしてくれたのがパウロなんです。それがローマ書でしょ。それからコリント書で復活のことを、またガラテヤ書で、

「律法の世界か、恵みの世界か」

ということを言ってます。パウロは一方では、

「自分はヘブル人中のヘブル人で、律法につきては責むべきところなきチャンピオンだ、ユダヤ教徒の中のリーダーだった」

と言っている。その自分が今度は異邦人に伝道する使命を与えられた。ペテロやヨハネたちはエルサレムにとどまりました。けれども、パウロとルカは異邦人伝道に出かけた。そうすると、異邦人に伝えるのに何が一番大事かという問題が出てくるわけですね。

ペテロやヨハネたちは、ユダヤ教を引き継いでいる。だから、割礼も受けなくてはならないかもしれない。やはり、律法も大事だ。キリストもありがたいけれども、律法も大事だ、神さまから出たものだから。そういう二つが共存しているんです。ヤコブなんかそうでしょ。それに対してパウロは徹底的にキリストのみです。その「キリストのみ」というのも、

十字架・復活から聖霊のキリストへ来たわけです。割礼なんか要らない。律法なんかくそくらえだ——「くそくらえ」という言葉ではないけれども——まるで、

「律法は呪いである」

という言い方をしてましょ。ガラテヤの人たちに対して、

「あなた方が聖霊を受けたのは、律法の行為を行ったからなのか、それとも聞いて信じたことによったのか。聞いて信じたことによったのなら、御霊によって始まったのなら、なぜ今、肉によって仕上げようとするのか。もう一度、原点に帰れ」

と言います。ですから、使徒たちにおいて、初代においてまだはつきりしていなかったことをはつきりさせてくれたのはパウロです。そのパウロをしつかり受けとったのがルターです。そのルターをしつかり受けとったのが小池先生なんです。しかも、ルター以上の深いところへと迫ろうとされたとは私は思います。なぜなら、ルターはまだ「洗礼」を大事にします。「聖餐式」は必要だと言います。それがヨーロッパの伝統ですね。小池先生は、

「洗礼というのは聖霊のバプテスマである。これが水のバプテスマが顕しているものの本質だ」

と言われた。それから聖餐は、パンをくらくすることは、キリストが、

「我を食らえ、我を飲め」

と言われた。我々は聖言と御霊の主さまといつも一緒にいる。イエス・キリストを食べる。

これが本当の聖餐だ。つまり、日常の次元に、何か特別な場所ではなく、日常の事態の中にキリストの世界がしみこんで、そこを天国にしてしまう。これが聖霊の現実だ。やがてきたべき神の国ではそれが本当に霊化されるけれども、今この地上では御霊が私たちと一緒に、

「どんな所ででも、おまえと一緒にだよ。一番低い所でおまえと一緒にだよ。おまえを助けるよ」

と仰ってください。

十字架の切り札

キリストの切り札は十字架です。ローマ書8章にあるように。サタンが訴えようと誰が何と言おうと、死にて甦り、天に上られたキリストは今、父の御前で執成とりなしていただく。

「私の十字架で彼は全く清められてある。全く罪から解き放されてある。旧き人間の彼はもう死んでいる。そんな旧き彼を見ないでください。私の十字架を通して生まれ変わった彼を見てください。彼の中にある私の御霊みたまを見てください。この御霊が彼を導いていきますから。もう、審判は私が全部受けました。全うされました」

と。キリストは十字架の姿で神さまの前に立ちただかつて、サタンが何を言つてこようと、「この十字架でなお足りないものがあるか！」

と言って叫んでくださる。これが十字架なんです。どんなミサイルが飛んでこようとびくともしない。それを全部跳ね返してしまう。それが根源現実なんです。だから、

「十字架のところで祈りなさい。十字架の前で祈るんです。十字架がないところはあぶないですよ」

と先生は言われた。十字架を仰ぐのではない。本当に十字架が迫ってくる。からだの中に十字架が立つ。しかもそれはもう血なまぐさい十字架ではない。先生は、

「いつまでも神さまが痛んでおられたら、私はやりきらないよ」

と言われた。女が子どもを産むときには憂いがある、痛みがある。しかし、生まれてしまつたらもう喜びしかない。キリストのゲッセマネの祈りの苦しみはご復活という姿において完全に払拭ふつしよくされました。今は霊界において十字架は輝いていると思います。この前にはいかなるものも全部消されてしまう。だから、ピリピ書でこのイエスのことを、

「天の御座みくらにあることを、神の子であることを固く保たんとは思わず、すでに人の姿をとつて地に現れ、十字架の死に至るまで従順に従い給えり。それ故に

神は彼を高くあげて、もろもろの名にまさる名を賜たまひたり」

という。つまり、いろんな霊的次元の霊的存在はありますよね。お釈迦さんも含めまして、いろいろあると思います。けれども、キリストは十字架で罪を贖みこい切った。それも己が功名心でも何でもありません。全く父の御意みこころを然りと受けとつて、贖みこいきつて、

「父よ、御手にゆだねます。私の霊を受けてください。彼らをどうぞ赦してや
つてください」

という祈りでもつて息をひきとられた。

「その方を神は高く引き上げて、もろもろの名にまさる名を賜たまひたり。だから、
すべての生きものは膝ひざをかがめて、イエスは主なりと告白して、栄光を父なる
神に帰きするのである」(ピリピ2・9～11)

とピリピ書に書いてあります。全く私は然りと思います。それは決して、他のもろもろの、人を助けようとする霊たちを否定するのではない。排除ではない。けれども、あの十字架で完璧に我々を贖みこいきつてくださったお方を、他に私は知らない。

お釈迦さまも慈悲深いお方です。衆生しゅじょうと一緒に苦しみ、衆生と一緒に救われようとして、悟りを開いて、天の世界へ導いていらつしやる。けれども、そのお釈迦さまの悟りを聞くまでの苦しみを実は根源的に主イエス・キリストの十字架は全部背負っている。私はそう思う。「私は一人で悟りを開いた」とお釈迦さまは仰るかどうか、私は聞いたことがないから知りません。たとえどう仰ろうとも、十字架であのような死をとげ、あのようなご復活の姿で現れ、あのようにして聖霊を注ぎ、そして、地の果てまで世の終りまで、共に平凡な人間たちと一緒に働き、業わざをなさつてくださるお方というのは、私は他に知らない。霊力的に働くのはいくらでもあります。けれども、こういう働きをなさつてくださるお方を私は知らない。

天国の実質を我々の中に

しかも、それは非常に合理的なんです。神は、いと高き方がどん底の姿で現れて、あのよう歩まれ、愛そのものに生きられた人に対して——それは御意みこころなるがゆえにです——義を貫かれた。神さまの御意を行うことが義です。その神さまの御意の究極は、我々滅びてゆく人間を救うということです。生命を与えようとする。もと生命に生きてきた人間が罪の中に沈んでしまった。それを救い上げようという、その神さまの聖なる御意を貫くことが義です。それをキリストは全うされた。それはご自分だけの問題だったら、とうに満足しておられる。もう始めつから「父よ、父よ」と言って神さまと一つですから。「父よ」と呼べない我々に、「父よ」と呼ばしめるためにその根源的解決をしてくださった。しかも、自己犠牲を通して根源的解決をして、地獄の底まで落ちてくださった。

「いと高き方がいと低い」

というのは、キリストは本当に靈的次元においても一番どん底に下って、苦しんでいる者たちを救い上げてくださった。

「それ故にこそ神は彼を高くひき上げて、諸々の名にまさる名を賜いたり」

というのは全く合理的で、これに反論することはできないと私は思う。キリストご自身が何も求めておられない。キリストご自身は何もご自分に求めておられない。救いを求める者にいと近く来てくださるほどのお方です。それをパウロが、

「キリストというのはこういうお方だよ」

ということを異邦世界に宣教しているわけです。我々だって異邦世界です。いろいろな神々があり、神社仏閣があります。いろんな宗教があります。その中でなぜキリストなのか。なぜイエス・キリストなのか、なぜこのお方なのか。それはこういうお姿で貫かれた方だからです。しかも死につばなしではなかった。弟子たちは、死につばなしでこれで終りだと思つてガツクリきてたところに、復活して現れてご自身の存在を顕した。それだけではない。

「祈つておれ」

と。祈っている弟子たちに聖霊となつて現れた。聖霊が原動力となつて、弟子たちを今度は地の果てまで証人として働かせてくださったっている。

我々東洋の一角にもこのようにしてキリストが伝えられた。私たちは小池先生という選びの器を通してその世界に導かれた。しかも、ここからが大事なんです。この小池先生が伝えてくださった福音というのは、己を何者ともしない。ということとは、己の宗教をも何ものともしていない。

宗教において非常に醜いというか、危険なのは、自己を絶対化することです。

「この宗教でなければ救われない。この宗教でなければ滅ぼすぞ」

とか、キリストはそんなことは仰らない。

「幸いなるかな、霊の貧しき者。天国はその人のものなり」

「武器をとるものは武器で亡びる。刀をとるものは刀で亡びる。だから、刀を収めなさい」

と。ご自分は全く無抵抗です。宗教的に征服しようなんて全然思っていない。神さまの前で最高のところに引き上げられる。しかも、その方は我々の一番どん底に御霊みたまという姿で、ご自身の分身、分霊という姿で我々の中に宿ってください。

では、我々に何を求めておられるか。

「絶えず祈っているんだよ、聖言みことばで生きるんだよ」

と。祈りも単なる自分の側の祈りならあぶない。聖言に裏付けられた祈りであるように。とは、どのようにすれば、聖言に裏付けられた祈りになりましょうか。それは御霊が導くよと。真理の御霊でしょ。助け主、聖霊でしょ。しかも、平安の霊でしょ。その霊はどこからくるんですか。十字架からくる。十字架をじつと見つめていたら、そこから光となつてあなたの中にもう来ているんだよ。太陽を見れば太陽の光が届いているように、キリストの黄金の十字架から光が来て、聖霊というお方が宿ってください。だから暖かい。

「平安だよ。世の終わりまで地の果てまでも、私はおまえと一緒にいるよ」

と言って、天国の実質を我々の中に、相對現実の中に宿らせてくださる。

「日々に勝利なり、日々に新たななり」

と告白させてくださる。

ローマ書8章

現実はずっとも良くないようにみえても、

「勝ち得てあまりあり」

というパウロのローマ書8章の絶叫がありますね。パウロのローマ書8章というのは7章を受けての8章なんです。7章では、

「ああ、われ悩めるひととなるかな、この死の体からだ」

と叫んでいる。パウロはせっかく御霊のキリストに導かれて、あれだけの御業みわざをしていながら、己自身を省みれば、

「私の中には二つの法が戦っている。神さまに従いたいという霊なる思いと、自己追求の肉なる思いとが戦っている。どうしようもない。自分の欲しない、自分はよしとしない、そういうわざを自分がやってしまうというのは、それは私ではない。私の中に巣くっている罪という別の霊の力が私をそうやって捕えている。ああ、我は悩める人なるかな、この死の体からだ。しかしながら、感謝すべきかな。神さまはキリスト・イエスにおいて私を罪と死の法のりから解放してください」

と。キリスト・イエスの中にある「生命いのちの御霊みたまの法のり」が——御霊の生命の法でもいい。この御霊の法、法則——御霊というお方がはたらけば、それは私たちの中に巣くっていた

「ああ、われ悩める人なるかな」

と叫ばせる「罪と死の法」から、罪と死という法則から完全に解き放してください。だからもう、人間パウロを見ない。パウロは、

「今まではいろんな人を肉によつて知っていた。しかし、今からは誰をも肉において知ることをすまじ」

と、コリント後書のたしか5章あたりに出てきます。

「キリストの愛が迫っている。旧き我は過ぎ去り、一切は新しくなった」

と言っている箇所があります。

「今までは自分は肉によつてキリストを知っていたけれども、今からはもはや肉によつてキリストを知ることすまじ」

とまで言っている。肉で見ていたわけではないけれども、より深く霊なるキリスト、今も生きてはたらきたもう御霊のキリスト。そして、御霊のキリストが仰がしてくださいる天界なるキリスト。そこは神さまの御座みくらです。そういう次元に私は生きる。そのときには、旧き人間パウロはもう十字架で完全に死んでいると言う。

「われ主と共に十字架せられたり。もはやわれ生くるにあらず。今この肉体にあつて私が生きているのは、私を愛し私のためにご自分の生命を献げたもうたこの御子キリスト、救い主キリスト、その方を信ずるがゆえに、その方を信受

することによつて、私はこのお方と一緒に生きているんだ」(ガラテヤ2・20)

と言つてます。さきほどのローマ書8章の前半は、肉なる人間と霊なる救いとの関係をずつと言つています。肉の姿でこのイエスを罰するという、肉において肉を審くという、そういうことを通して、今まで律法が達成することのできなかつた救いみわざの御業を神は達成された。御子の十字架によつて。だから、私たちはもはや肉に対しては負つていない。霊の中に生きる。霊的な生き方をする。この霊こそが、

「アッバー、父よ!」

と呼ばしめてくださる。奴隷の霊ではない。「アッバー、父よ」と呼びしめる子である。そのようにして勝利した。我々はキリストと一緒に神の相続人である。これは栄光を受ける相続人であるとともに、苦難をも共にする相続人でもある。キリストは我々を「兄弟」と呼んでくださった。だから、キリストと一緒に苦しみうではないかと、そういうことを言います。そして、今このときは、やがてきたるべき栄光に比べればもう問題ではない。すべての被造物は今、苦しみの中に閉じ込められている。御霊の人たちの出現を待つている。その自然界の呻きを聞いている。目に見える望みは望みではない。見えないからこそ、あなた方はそれを忍耐をもつて待ちなさいと。

26節にいきまして、御霊も我らのために執り成したもう。御霊言い難き呻きをもつて執り成したもう。御霊の思いを知りたもう方は御霊の執り成しの祈りを聞きとどけてくださる。

それゆえに、神を愛する者のためには一切のことが相働きて益となる。どんなことも結局、プラスにひっくり返されてしまう。どんなこともですよ。「これは例外」と思わないでください。どんなこともこのキリストはひっくり返してください。それを本当に信ずることです。

だから、さっきの讃美歌（召団讃美歌B2「使徒らの昔を」）の、

「み霊^{たま}のわが主はわが身をいだき、十字架に耐えうる力を賜う」

という。あの「わが身」は「この身」でもいい。私は「この身」と言いたいですね。この身を、自分の身をいだく。

「み霊のわが主は、この身をいだき、十字架——この地上でのいろんな苦難、十字架

——それに耐えうる力を賜う」

と。パウロのローマ書8章を三つに分けるならば、始めの三分の一は「十字架の贖い」のことを言って、その次の三分の一は「希望」のことをうたいます。それから26節以降から31節までのところは「勝利」をうたっています。

「誰がキリストの愛から我らを引き離すことができるか」

つまり、神さまの愛というのはキリストにおいて現れてきた。キリストにおいて現れた神さまの愛から我らを引き離すものは絶対にない。どんな霊的な次元のものも、生も死も、御使いたちもどんなものもキリスト・イエスにある神の愛から我らを引き離すことはできないと。

「我らは屠^{ほふ}られるべきものとして見られている」

と書いてあります。でも、

「これらのことの中にあつて勝ち得てあまりあり」

と。そういう盛んなるローマ書8章というものはみごとに、小池先生がつかまえられた「十字架・復活・聖霊」という構造を表してくれている。

み霊のナビゲータ

私たちにこの世においていかに生きるべきかということを語ってくれているのは、ピリピ書、コロサイ書、エペソ書の三つのパウロ書簡です。ピリピ書が一番素朴です。コロサイ書は非常に次元が高い。エペソ書もそれに並ぶようなもので、コロサイ書とエペソ書は本当によく似ている。両者に共通しているのは、神さまが我々のためにどんな凄いことをキリストによってなしてくださったかという、我々の霊的な次元、今どんなところに我々はいるかということをまず始めに2章、3章を費やして書いている。

このようにあなた方も素晴らしい神の子にされたんだから、神の子らしく生きなさいと、帝王学を教えてください。あなた方は神の相続人である。神の国を受け継ぐという凄い望みを与えられた。どうして、この地上のことにチマチマと、うろちよろしているのか、という書き方でしょ。妬^{ねた}みだとか嫉^{そね}みだとか、何か肉のわががいろいろある。そんなものはかたぐり捨てて、キリストを着よ。キリストによって常に霊を新たにされよ。慈悲の心に——結局は

「愛」という一言で尽きますが——そういった愛の中に生きよと。コリント前書13章13節と同様に、

「信仰・希望・愛、この三つのうち最大のものは愛である」

と言う。我々が地上で生きるための指針を与えてくれるものは、ローマ書12章。ピリピ書やコロサイ書、エペソ書の後半部分は、我々が神の子らしく生きる道を示してくれている。決して新しい律法ではない。けれども、我々はナビゲータが要る。案内人がどこへ連れて行ってくれるかが大事です。我々は聖霊という御霊、助け主、真理の御霊というお方がナビゲータとして私たちをちゃんと連れて行ってくださる。だから、そのお方を大事にしないといけない。そのお方は非常に慎み深いから、私たちが「出て行ってくれ！」と言ったら、すぐ出て行ってしまう。絶対、「出て行ってくれ」なんて言うてはいけません。大切に大切にしなければいけない。そのお方は、

「あなたの方のために所を備えに行く。場所の用意ができたなら、あなた方を再び迎える」

と、ヨハネ伝14章にありますね。

「汝ら、心を騒がすな。神を信じ我を信じなさい」

と。天のところに、どこか天国に住まいを備えておられるかと思ったら、実はそうじゃなくて、まず私たちのところへ降^{くだ}ってきて、

「父と私とは一緒におまえたちと住^{すみ}処を共にする」

と言われる。降^{くだ}ってきてくださるお方です。降^{くだ}ってきて常に天界へ目を向けさせてくださる。

「わが名によつて祈り求めよ。そうしたら、私は聞き届けるから」

と言つてくださる。パウロも言いました。

「主は近い。なにごととも思い煩うな。ことごとに祈りと願いを捧げ、キリスト

に感謝しなさい」

と。要するに、「キリストの御名^{みな}に在^あつてことごとくなせ」ということ。御名^{みな}にあつて人を愛する。御名^{みな}の中で御霊^{みたま}によつて人を愛する。よく

「御霊の愛、御霊にあつていただける愛」

という言葉が出てきます。私たちは人間に向かうときも——これは夫婦の間もそうです、恋人も、お友だちもそうです。その他どなたであつても——直接関係ではなくて、常に一遍、自分を十字架に付けたうえで新しくされたものとして、御霊というお方を、十字架・御霊を媒介にして人に接する。そうすると、柔らかくなります。それまでは、「こんちくしょう、この野郎!」と思った人に会つても、この御霊がくれば柔らかくなつて、

「お元氣ですか、良かったですね」

と(笑)、常に人の喜びを喜びとすることができるようですね。

御霊のコーチ

パウロがローマ書12章で、

「自分たちを迫害する者のために祈れ。審判は神さまに委ねよ。復讐するは神にあり。あなた方は善でもって悪に勝ちなさい」

と、こう言ってくれている。ああいう12章は本当にコンパクトに我々の地上での生き方を表してくれています。その他パウロ書簡の後半部は、地上にある夫婦関係はこうありなさいとか、社会で上司との関係はこうありなさいとか——「奴隷」とかいような言葉も出てくるけれども——みなこれは律法ではなくて、ナビゲータなんです。我々を正しい道に導いてくれる指針です。我々はやはり、死に至るまで指針に従って歩んでいくということが必要だと思えます。自分が自分の主人公なんかにならない。いつまでたっても、

「こうなんだよ、ああなんだよ」

とコーチしてくれる良きコーチに導かれて歩んでいく時に安泰なんです。コーチを持つて練習したり歩んでいくということは決して自分にとってマイナスというか、卑下すべきことではない。どんな選手だつて、プロ野球だつて何だつて、ちゃんとコーチが付いてコーチしてもらっていると、自分でわからないことをちゃんと指摘してくれる。すぐ自分が修正できる。

やはり、第三者的な目をもって——しかしながら慈しみの目をもって——その人を一番よく知っている、本当に自分以上に知ってくれている人の導きに委ねて歩む。その方はしかも

広く高次なお方です。御霊なんですから。キリストの霊なんですから。その霊に導かれていくということが一番大事なんです。いろんな守護霊というのがあるそうです。どなたにも守護霊がついているそうですけれども、最高の素晴らしい霊はこの御霊みたまなんです。

ですから、今日の題にかかげました、

「み霊たま、聖言みことば、そして祈り」

なんです。御霊に導かれて聖言をくらう。聖言をくらったら祈る。祈りの根底には十字架が立っている。そして深く祈る。するとまた御霊に満たされる。だから「み霊、聖言、祈り」の根底に十字架がある。御霊はキリストの栄光を示してください。そういう良き循環が行われて、我々は常に生き生きとした霊的存在として、向かうべき目標に向かって歩んでいける。

二つの場

我々が置かれている場というものが二つある。一つは世に向かつて。この「世」というのは全世界ですよ、日本なんていう狭い世ではない。全世界に向かつてという私たちの場、あるいは使命というものがある。それから、仲間うちです。兄弟姉妹、エクレシヤ。

「分裂する国は亡びる」

とキリストは言われたでしょ。我々の中に、このキリスト召団ならキリスト召団、あるいは大きく言えばキリスト教界かも知れませんが、まず私が思っていますのはこのキリス

ト召団、あるいは自分の家庭だとか、そういう小さな仲間うち、そこにキリストの霊が貫かれていること。キリストの愛が、聖霊が充滿していることが大事です。キリストは、

「兄弟姉妹たち（弟子たち）あなた方が互いに愛し合っているならば、それによって世の人たちは、あなた方が本当に私の弟子だということを知ってくれる」

と言われた。信仰だとか何だと言ったって、それは目に見えない。けれども、人々が愛し合っている姿、そこに漂っている愛、これには人々は感ずるんです。それが実に暖かく潤っている。それで、本当に清らかな霊気が流れている。そういうことが内部に成り立つためには、分裂はいけません。だから、パウロは、

「人を己よりまされりとせよ。自分のことばかり思わないで人のことを思いなさい」

と言っています。極めつけは、

「キリスト・イエスの心を心とせよ」

と、ピリピ書にありますように、己を低くして他を高くする、他を尊ぶ、そういう^{いたわ}りの心、そういう同情の心が大切です。一つの枝が苦しむならば、自分も同じ苦しみを味わう。そして共に祈る。喜ぶ者と共に喜び、泣く者と共に泣く。その心、それがこの集會に、言わず語らず充滿しているならば、そこへ入ってくる人は安心します。

「これなら大丈夫だ、ここなら安心できる、ついて行ける」

と、そう思ってきてくれます。だから、内部が分裂したら、とてもだめです。表むき善いことを言っているけれども、陰で悪口を言っていたらだめなんです。まずは内部が本当にキリストの愛の霊に満たされている、生命づいている、生き生きと希望に燃えている姿が大事です。

無者キリスト

それから、世に向かつては「無者^{なむじや}キリスト」です。無なんです。キリストは無でした。キリストは己を何者ともされなかった。十字架の死に至るまで神の御意^{みこころ}に従った。その御意は万人を生かすこと。万人とは全人類と言ってもいい。一人ひとりです。生きとし生けるもの、一人ひとりです。もつといえ、虫けら一匹にいたるまでです。

「二羽の雀も父のみ許しなくば地に落ちない」^{すずめ}

と言われた。そういう個を、一つ一つを「インデビジュアル」(individual 個々の)という。もうこれ以上割れない存在。この個というものを最大限尊重してくださったのがキリストです。そのキリストが、

「自分は何ものでもない」

ただ「父よ」と呼んでおられた。父なる霊を受けとられるから「父よ」と呼んでおられた。「彼らをこうしてやってください、ああしてやってください」と。キリストの祈りは全部、我々が本当の救いに与^{あず}かるといふことだけを祈ってくださる。それは父の御意だからです。

「父の御意は私に賜ったものを一人も失わずして、終りのときに甦えらするこ
れなり。永遠の生命を与えるこれなり」

と言われた。

それに徹しているような宗教は、己が教義とか己が勢力の拡充ではなくて、本当に人や生
きとし生けるものを全部活かす。しかも、己を犠牲にして他者を活かすという愛に徹する宗
教ならば、決して排斥し合う関係にはないはずです。排除の論理ではない。包摂なんです。
太陽の光は地球を包摂しています。たった一つの太陽がこの地球を包んでいます。何億年も
前から生きとし生けるものを活かしている。神さまはそういうお方です。

「それを神と呼ぼうが、アラーと呼ぼうが、ヤハウエーと呼ぼうが、そんなことは
関係ない」

と小池先生は言われた。たまたまモーセには、

「我は有りて在るものなり」

とご自身を顕された。キリストは「父よ」と呼ばれた。根源なるお方がいろんな形をとって、
完全に、あるいは不完全に現れていらつしゃると私は思う。だから、それを私たちが品定め
することは何もいらない。キリストは決して排他的なお方ではない。自分たちを宗教的に迫
害する者たちのために祈って祈って祈りぬいて、

「彼らを赦してください」

とまで祈った。そしてご復活を通して死と罪に勝つ勝利を現し、ご自身の霊をくだして、

「おまえたちも私と同じ姿で生きよ。愛し合って生きよ。たった一つの戒めは

愛だ。人その友のために己が生命を捨てる。これより大いなる愛はなし」

と言われた。これを私たちは世に向かつて訴えていく。

「あなた方は何派ですか。カトリックですか、プロテスタントですか？」

と、まずそう聞かれますね。それに対して、「流れからいうと、プロテスタントでしょうね」。
「どこの教会ですか？」。「小池辰雄という方が開かれた……」と、説明が面倒くさい。もう
そんなのはやめたいんですよ、私は。

「素性はどうだつていいじゃありませんか。私という人間を見てください。十年つ
きあってください。それで信用できなかったら去ってください。いや、三年で結構
です。いや、一年でも結構です。一回でも結構です、一遍来てください」
と言います。

「私を見たものはキリストを見たのである」

と、そういうふうには皆さんお一人お一人がなさる。それが証し人です。しかも、その人自身
は何ものでもない。御霊のキリストがその方の中で光っておられるから。

「汝らは世の光なり」

というのは、「私がおまえの中で光っているから安心しなさい」ということです。

賜りたる無

ここ、皆さまの前、この講壇に立つためには、その根底がなかったら立てないですよ。自分は何で立てるのだろうか。主さま、あなただけですと。あなたが完全に無者であられたように、私に無を賜ったから。賜りたる無だからです。

「何ものでもなくてよい。宗教的にも何もいらん。私が全部備えた。安心しろ」

と。そう言ってくださるから、私は立てるんです。あの特別集会だってそうです、今日だってそうです。もし自分の何かということを抛り所にしようと思ったたら立てない。

だから、小池先生はよく仰った。

「奥田くん、無というのは楽だね。ありがたいねえ。こんな楽なことはないよね」

と本当にしみじみ仰いましたよ。私は「ああ、そうですか」と、そのときはポカーンとして、わからなかったけれども。本当にそう言っておられた。

「無者なんだよ、無者なんだ。無はありがたいねえ」

と。しかも、「賜りたる無」と仰った。「根源現実」と言われた。いまだかつて根源現実なんて言った人は誰もいません。たいていは、「十字架の贖いが私の中に臨んでいるのに、何でこんなにいつまでもだめなんだろうか」といつて自分で苦しむ、パウロと同じように。そこを小池先生はパツと分離された。「賜りたる無の根源現実」と「生の自分の相対的現実」とを徹底的に分離された。「あそこまで分離していいかしらん？　もう少し人間小池も反省し

てもらいたい」と、私は本当のところ何度も思った。本当に徹底しておられた。いや逆に、徹底しないとやり切れなかったんでようね。

自分を見れば、もう立てない。だから、徹底してこの「賜りたる無」にきた。時々泣き伏しておられたでしょ。十字架の話になると、異言がバーツと流れてましたね。あの姿は本当に厳かでした。何回あの十字架の話をなさっても、先生にとってはいつも新しい。それを告白されるたびに異言が迸りでて、時には泣き伏された。そういう姿だった。私はそれを現実に見てますから、人間小池なんて本当にどうでもいい。その方の中に今光っているキリスト、この告白をさせていらつしやる御霊みたまのキリスト、このお方の前に私も平伏ひれふだけです。

無者キリスト道

御霊のキリストの前に私も平伏したい。先生も平伏している。それを、

「師の跡を求めず、師の求めたる処を求めよ」

という言葉として私は表現したんです。同じ目標に向かって行きましょう。人間小池を乗り越えて、先生が目指したあの御霊のキリスト、そこに向かって行く。パウロもそうだった。

「後ろのものを忘れ、前に向かって進んでいく」

と言った。「求めるものは使徒的な次元である」と先生も言われた。自分で自分が使徒的次元に達しているとか、そんな品定めは一切いらない。そんなことは自分で評価できることで

はない。ただただひたむきにキリストさまに委ねるしか私には立つ瀬がない。

「我みたまここに立つ」と、ルターは聖書の上に立ったと言います。私はこの十字架・復活・聖霊の、この御霊みたまのキリスト、この根源たる御霊の主さまというお方にだけすがっていく。あえて言うなら、十字架という場です。無を賜っているその場。そこに立つて、告白せしめられるものを告白する。私らしく告白する。それしかありません。

それに共感してください。もし共感してくださいれば、そこで「一即多」ということが成り立つんです。私というまぎれもない個性である奥田昌道という一人の個を通して告白されることがみんなに共有されるということは、一即多なんです。

それから、「多即一」という。いろんなものが世の中にある。けれども、極まるところは一つのところに収斂しゅうれんしていく。これが多即一という表現で言われている。宗教的にも私はそうありたいと思う。

我々が告白している無者むしや・キリスト・道、これは一なんです。それが非常に普遍性を持っている。一即多です。それからまた、他の本当によき宗教であるならば、みな共通の根があるはずだ。それは愛であり、無私であり、無私の愛、砕けである。そういった根源から発している多であるならば、姿、形は変わっても、我々は手を握れる。キリストを告白する霊は神からきている。キリストを告白しない霊はだめです。そのキリストとは受肉のキリストです。

終末的実存者

そのようにして、私たちはこの使徒の書簡を読んでいますと、それによって非常に広大な世界に入れられる。

「その愛の広さ深さ高さのいかにばりなるか」

「キリストに根ざして歩め」

とか、ピリピ書やコロサイ書でもパウロが祈ってくれている。

「あなた方の霊が本当に知恵と悟りを得て、深く神の御意みこころを知り云々」

ということを祈ってくれたり、時々パウロは書簡の中で、父なる神の前に跪ひざまずいて祈ってくれたりしています。

そのときにそのパウロの心を心として、私たちも単に自分のための祈りではなくて、兄弟姉妹のために、それから、まだ父なる神を、キリストを知らない多くの同胞のために、祈りを捧げていく。そのときに、やむにやまれずして、ある方に出会わされたり、ある方に語らされたりする。決して大衆伝道なんかは、私は今、使命として賜っていないと思っています。やがて、そんなときがくるかもしれません。それは全部、我々の思いからではなくて、御霊に迫られて、その方が我々を押し出してください。そういう時を待つ。

我々は常にそのような御霊みたま・聖言みことば・祈り、その根底に十字架の贖いが、賜りたる無むというものがある。その場で深く聖言をいただき、深く祈り、そして御霊に導かれ満たされて日々

を歩む。日々を歩むということが大事なんです、正にこの娑婆^{しやば}で。本当に娑婆というのは大変なところです。こんなところで「私は気楽でいい」なんて言う人たちは、私は信用しない。そんな小市民的な幸せの中にうごめいている人たちをサタンは喜んでいきますよ。別にけなすわけではないけれども、私たちは死に至るまで主と共に働く責任があります。パウロは、

「祭壇に血を注ぐとも喜ばう、義の冠は待っている」

と言ってましょ。それらの人たちは殉教していった。小池先生も最後まで働かれた。私たちは小市民的なこの世的ないわゆる幸せという小さな殻に閉じこもることなく、それをぶち破つて、本当に天から賜る生命をわかし与えていく。五千人の人にわかし与えてなおやまないという存在に主さまは私たち一人ひとりを変えようとなさっている。祈りが捧げられている。

「御霊^{みたま}言^{たま}い難^{がた}き呻^{うめ}きをもて執^{しつ}り成^なしたもう」

というのはそういうことです。自分自身のための祈り、ただ自分の救いに汲々としていたらだめですよ、皆さん。そんなものはもう成ってしまっているんだから、根源現実で。成ってしまっている根源現実がいかに皆さんの中に受肉して、根を下ろして芽を出して大きく育つていくか。空の鳥が宿るようになる。

「芥子種^{からし}一粒は、蒔^まかれる前はどんな種より小さいけれども、蒔^まかれたらやがて育つて、空の鳥がそこに巣をつくるくらいに大きくなる」

と言われたでしょ。我々はそのように召されているんですよ。

一粒の麦

小池辰雄というたぐいまれなる霊的な存在、そういう方に我々は出会わせられた。霊能のある人はたくさんいますよ。賢い人もたくさんいます。でも、先生のような、ああいう方というのは本当に私は希有^{けう}なる存在だと思います。非常に情が深い。それからまた学者的でもある。旧約・新約に精通しておられる。あるいは、仏教だとか哲学なんかに精通しておられる。その中で無者^{むしや}キリストを叫んで、御霊^{みたま}の世界を自分自身の中に宿して、

「私から御霊をとつたら小池はゼロだ。何も無い。御霊^{みたま}だけだ」

と言われた。そういう方に我々は出会わせられた。これを空しくしたら申し訳ない。吉田松陰というのは20数歳でこの世を去っているんですよ。けれども、その志はずっと受け継がれていった。佐久間象山とかいろんな人を通して。そのようにして正に、

「一粒の麦^こ地に落ちて死なずばただ一つにてあらん。死なば多くの果^みを結ぶべし」

と。小池先生もそういう意味の「一つの麦」であられるんです。お兄さんが一粒の麦になった。今度は小池先生が一粒の麦になった。また今度は、我々一人ひとりが一粒の麦となつて、地に死に天に生きる。そういう天的生命に生きる者を、先生は「終末の実存者」という言い方をなさった。難しいですね、先生の言葉は。つまり、神の国が迫っている。その迫りの中でキリストによって福音が語られた。それと同質の次元に我々は生きようということです。

「我々は生きていようでありながら、根源的に死んだものだ」

と、コロサイ書でパウロは言っています。

「汝らは死にたる者にして、其の生命はキリスト・イエスとともに神の中に隠れあればなり」

キリストが現れたもう時にあなた方も輝くんだと。だから、あなた方の本質というのは既に十字架で死にたる者であり、御霊によって生きたる者、神の中で生きたる者であるという。その自覚を常に持っていたら、この世で少々、不公平な扱いを受けたっていいじゃないの。「なんで、私だけこんなに無茶苦茶に働かされるのか、同じ賃金なのに」なんて思わないで。有能な人はそれだけ用いられてしまう。不公平にできているんです、この地上は。その分、天上で数倍いただきます。地上でも最後はいただくかもしれないよ。それは知らんけれども、そんな勘定はしない。地上を突き放して生きるためには、天のものをしっかりとだいていないと生きられない。やせ我慢では生きられない。そんなこんなを私は今日、皆さんに申し上げたかった。

世界に向かって発信していこう。排除の論理ではない。すべてを活かしていく。万物を活かしていく。そういう根源的なものを私たちはいただいた。そのようにして私たちはまた新しく歩まされたいと、そう願っております。いや、私というのは楽しい人間になりました。昔は顔が引きつっていたのにね。(笑)

「一切のことが相働きて益になる」

という。一切ということは、すべてということですよ。どんなマイナスも全部プラスにしてください。過去を歎くことはない。常に日々新たにです。それではお祈りいたします。

祈り

主イエス・キリストさま。このようにして、愛する兄弟姉妹たちと、小池辰雄先生の昇天十周年を記念する会を持つことができました。司会者が、

「小池先生は天界に往つてから戻ってきた。我々の中に今生き、そして動き、導いておられる」

と告白しましたが、本当に主さま、あなたが聖霊という、御霊というお姿をもって私たち一人びとりの中に既に宿ってくださいっており、常に目を天に向けさせ、地に死んで天の次元に生きることを促してください感謝でございます。

「そのためにはいつも祈っているんだよ。あなた方は祈ってますか。十字架だよ、この根源現実を忘れてはだめだ。あるがままの自分をキリストにぶつけなさい。キリストの中に投げ身しなさい」

と、小池先生はよく仰いました。

「恵福^{さいわい}なるかな、汝、わが十字架によりて既に霊貧しくされてある者よ、復活

の我、聖霊の我、汝のうちにあり」

と、そのように先生に迫ってきた聖言が、爾後何十年にもわたって先生を導いて、いつも天的次元に活かしてくださいました。このような先生を示してください、出会わせてくださったことに感謝いたします。

私たちはどこまでも、人間小池あるいは肉なる小池先生ではなくて、天の次元に生きぬかれ、無者キリストに生きぬかれた先生のお姿に連なって参ります。先生が求め続けられた処に向かつて私たちも進んで参ります。

主さま、どうぞいよいよ天界から私たちを応援してください。私たちは実に数少ない渺々たる存在です。けれども、主さま、あなたが私たち一人ひとりの中に宿りたまひ、いのちの生命づき火となつて燃えてくだされば、この火は燃え広がって参ります。どこまでも我らの思いではなく、あなたの御旨が、御思いが成りますように。

主さま、そのために私たちの地道な日々の働きをどうぞ祝してください。どんな小さなことも主イエス・キリストの御名にあつて、御名に栄光を帰しつつ成し遂げていくことができますように、主よ、おん助けください。

また、弱っている方々、肉体に病を持っている方々、苦しみを背負っておられる方々のそば近く、あなたがご臨在くださって、慰め主、助け主となつて具体的現実的におん助けくださいますように、希い奉ります。

「何ごとも私の名によつて祈りなさい、願いなさい。私はそれを為すから」

とお約束くださったあなたでございます。祈りにおいてどうぞ大胆ならしめてください。

主イエス・キリストさま。どうぞ、この新宿集會に連なる兄弟姉妹たちを特別におん顧みくださつて、先生が目指されたところを、この兄弟姉妹を通して、いよいよ成就して下さるようにお用いください。僕もこの新宿集會の一員として、本當に一つとなつて進んでいきとうございます。また新宿集會の外からも集まつてくださった兄弟姉妹たち——垣根はありません——主にあつて本當に一つ、

「主は一つ、御霊は一つ、信仰は一つ、バプテスマは一つ」

と、本當にそのようにして、隔ての中垣を取り壊し、一つにしてくださいます主イエス・キリストさま。どうぞあなたのお心を心として、いよいよ私たちを進ませてください。この切なる願いと感謝と祈りを主イエス・キリストの御名を通して御前にお捧げいたします。アーメン。

（『エン・クリスト』59号、2007年3月発行より転載）